「福島を生きる」

子どもらのため教職員奮闘

郡山ザベリオ学園

東日本大震災から9カ月余りがたったが、東京電力の原発事故の影響から、福島県郡山市にある郡山ザベリオ学園（幼・小・中）では、幼稚園の園児と小学校の生徒の約4分の1が転校する事態となった。福島に残った園児・児童・生徒たちの心のケアに努めながら、「福島を生き抜く子ども」に育てようと同学園の教職員たちは奮闘している。学園長を務める、カトリック信者の守屋博子さんに、学園の取り組みについて聞いた。

郡山ザベリオ学園では、原発事故の影響で県外に避難した子どもが、幼稚園では全園児190人中60人と約3分の1に上り、小学校では全児童330人中70人で、約5分の1が転校。幼・小・中を合わせると休学者と転出者は140人に上る。

親友が県外に引っ越していくさみしさ、福島を離れる友への同情、また福島で暮らす不安など、残された子どもたちの心は揺れ動いている。

「それでも子どもたちは、何も言わずに我慢しているんです。『福島で頑張ろう』とけなげに生きる姿を見て、逆に私たち教職員が勇気づけられ、子どもたちのために『福島県で最も安全で楽しい学校』にしようと、一丸となって頑張っているんです」と守屋学園長は語る。

学園では、例えば放射能対策として、除染機を購入し、教職員が毎週朝7時から校庭や校内を除染。休日の除染には保護者も全面協力をしてくれる。また教員たちは、学園に残った子どもたちのために、授業や学校生活が楽しくなるようにと知恵を出し合っている。

「運動会など、校庭で実施されるものはすべて中止になったので、その代わり、限られた中で時間割の変更をして、体育館でいろいろなイベントを開催しました。教師たちも、①あいさつ等の声掛け②否定的な言葉を使わない③授業の前には明るい話題を取り上げる④生徒が頑張っていたら必ずほめる―ことに以前よりも気を付けています」

また全国各地のカトリック学校から義援金や激励の手紙をもらう度に、その善意について話し、宗教の時間には、「福島に生きる」意味について考える時間を持たせている。そして、世界でもっと苦しんでいる人たちのことに思いをはせ、自分たちの痛みや苦しみを肯定的に受け止めていくことのできる人間になろうと教えているという。

福島の詩人に心を寄せて

こうした教職員たちの努力や、保護者と教職員が一緒に頑張っている姿に加えて、子どもたちの意識を変えていったのは一つの詩だった。それは、福島で被災した詩人、福島の公立高校の国語教師でもある和合亮一さんの「決意」という作品だ。郡山ザベリオ学園の教師がこの詩に共感して、その詩を学校の壁に張ったことがきっかけだった。一部を紹介する。

「（前略）
福島を生きる
福島を愛する
福島をあきらめない
（中略）
福島は私です
福島は故郷です
福島は人生です
福島はあなたです
（中略）
福島を守る
福島を取り戻す
（中略）
福島で生きる
福島を生きる」

これを読んだある小学生がつぶやいた。「僕たちも郡山で頑張ろう」

守屋学園長は、この詩のメッセージに加え、「ピンチをチャンスに変える」発想や、また「私たちは神様に生かされているんだ」というカトリックのメッセージを、福島全土の子どもたちにも届けたいとPR。その想いを込めた学園広告を地元紙に掲載した。そして詩人の和合さんと対談した20分番組を福島放送で放映。費用は保護者や支援者が協力。バザーや夏祭りには地元の被災児童を招待し、学園を地域に開放している。

また震災後は、共働きの家庭が増えたため、学園では保護者の要望に応え、校内の元修道院の空き部屋を使い、預かり保育・学童保育・安価の学習塾も始めた。来年度からは、地元の被災児童も引き受ける意向だ。

守屋学園長は今、こう感じている。

「学校運営という点で経済的にはかなり大変ですが、人の心の痛みが分かり、自分たちのつらさを乗り越え成長する子どもたちの姿は何ものにも代え難いです。地域宣教の拠点であるカトリック学校として、子どもの幸せのために『できることは全部やろう』と地道な努力を続けるだけです」

同校の生徒有志が12月17日、クリスマス企画として「Smile for all（スマイルフォーオール）～あなたへ　わたしへ～」を同校内で行った。冬本番で冷え込む夜となったが、全国のカトリック学校や修道会から、激励や連帯のメッセージを記した600個余りのろうそくが贈られた。東京などの女子修道会からは手作りケーキも届けられ、主催者は「つながりをみんなで感じながら過ごした一日でした」と語った（写真提供＝佐治健男さん）